

令和八年度 入学試験問題

国語

注意事項

- 一 問題冊子と解答用紙は、試験開始の合図があるまで開いてはいけません。机の上の受験番号が受験票の受験番号と同一であることを確認しなさい。
- 二 受験票は、受験番号が見える面を上にして、机の上の受験番号シールと並べて置きなさい。
- 三 受験票のほかに試験時間中机の上に置くものは、黒鉛筆（和歌・格言等が印刷されているものは不可）、鉛筆削り（電動式、大型のもの、ナイフ類は不可）、時計（辞書・電卓・端末等の機能があるものやそれらの機能の有無が判別しづらいもの、秒針音のするもの、キツチンタイマーや学習タイマー、大型のものは不可）、眼鏡、ハンカチ、目薬、ティッシュペーパー（袋又は箱から中身だけ取り出したもの）です。
- 四 解答用紙に、正しく記入・マークされていない場合は、採点できないことがあります。携帯電話等の電子機器類は、必ずアラームの設定を解除し、電源を切っておきなさい。試験時間中にこれらをかばん等にしまわず、身につけていたり手に持っていたりすると不正行為とすることがあります。
- 五 また、試験時間中にかばん等の中で携帯電話等の着信音やマナーモードの振動音などが発生した場合には、監督者が本人の了解を得ずにかばん等を試験室外に持ち出し、試験本部で試験終了まで保管します。
- 六 監督者の指示があるまでは、試験室から退室できません。
- 七 試験開始の合図があったら、解答用紙の所定の位置に受験番号シールを貼り付けなさい。なお、氏名は、どこにも書いてはいけません。
- 八 問題は2ページから15ページまであります。試験時間中に問題冊子の印刷不鮮明、落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気づいた場合には、手を挙げて、すみやかに監督者に告げなさい。
- 九 試験時間中気分が悪くなった場合は、監督者に申し出なさい。ただし、休養等に要した時間の延長は認めません。
- 十 不正行為を行った場合は、その場で受験の中止と退室を指示され、それ以後の受験はできなくなります。また、同日に受験したすべての教科・科目の成績を無効とします。
- 十一 解答用紙は必ず提出しなさい。問題冊子は持ち帰りなさい。

〔一〕 次の文章を読んで後の間に答えなさい。(字数制限がある場合、句読点・記号も一字と数える。)

^{} 社会性昆虫が「集団での意思決定」を行うという事実が、近年、生物学や、人工知能の研究を含む情報科学の分野で大きな注目を集めています。

私たちは、会社の会議、いろいろな委員会や裁判員制度、ひいては議会に至るまで、集団での意思決定の仕組みを、人間だけでも^{*}専売特許のように考えがちです。言語をもつ人間だからこそ、話し合っ¹て皆で決めることができるという見方です。この意味で、言語をもたないハチやアリが集団意思決定を行うという話は、ただの¹喩え話にすぎないと思われるかもしれません。

しかし、ヒト以外の動物種においても、動物たちの示す特定の身体姿勢や運動のパターン、発声の仕方などが投票や意見表明と同じ機能をもつことが、近年の生物学の研究から明らかにされています。こうしたかたちでのメンバーの「投票」は、多数決などの「集団決定ルール」を通じて、巣場所の選択や移動の開始など、群れ全体での統一的な行動にまとめられます。言語能力はとも重要ではあるものの、集団意思決定を行うための必要条件ではありません。

つまるところ、集団意思決定とは、個々のメンバーの意思(「餌場Aに移動したい」、「この巣からそろそろ別の場所に引越したい」などの意思)を、群れ全体の行動選択にまとめあげる集約の仕組みに過ぎません。この意味での集団意思決定は、人間に固有ではなく、社会性昆虫のほかにも、魚類、鳥類、食肉類、^アレイチョウ類などにおいてかなり広く認められます。

具体例として、ミツバチのコロニー(群れ)での巣探し行動について検討します。

私たちが、家族で相談しながら新しい住まいを探したり、担当の部署などが話し合っ²て会社の移転先を探すのと同じように、ミツバチもまたほかの個体と情報を共有しながら、コロニー全体にとっての新しい巣(引越し先)を探します。²生物種としてのヒトとミツバチは、進化の系統樹のうえで遠く離れているものの、集団意思決定場面での行動の組み立て方(仕組み)は、³巨視的に見ると驚くほどよく似通っています。しかし、仕組みの細部におけるいくつかの違いが、ミツバチの集団意思決定とヒトの集団意思決定の間で決定的な違いを生み出す可能性があります。

初夏になると、ミツバチのコロニーは分蜂ぶんぼうと呼ばれる行動を見ることがあります。コロニーの個体数が増えすぎると、女王は働きバチの三分の二ほどを連れて新しい巣を求めて移動し、娘の新女王が残りの働きバチとともに、元の巣に残留します。巣を離れた一万匹近いハチたちは、近くの木の枝などに仮の宿であるアゴヒゲ状の塊を作り、その中から数百匹のハチたちが、いわば「探索委員会」として新たな巣の候補地を探しに飛び回ります。

これらのハチたちは仮の宿に帰還後、自分が見つけた候補地について、8の字ダンス (waggle dance) によって、ほかの探索委員に情報を伝達します。読者の皆さんは、高校の生物の授業で、ミツバチが身体イを震わせながら8の字のような動きをし、ダンスの方向と太陽が作る角度によって、蜜のありかや巣の候補地の方向をほかのハチたちに伝えるという話を聞いたことがあるかも知れません。

A、重要なのは方向だけではありません。このときのダンスの長さや熱心さは、見つけた巣の候補地をそのハチがどの程度良いと知覚したかを反映しています。候補地の質が良いほど、ミツバチのダンスは長く熱心なものになります。8の字ダンスは人間での投票や意見表明に相当するのです。

まだ飛び立っていないハチは、帰還したハチたちのダンスによる「宣伝」を見て自分が探索する方向を決めるので、熱心に宣伝される巣の候補地ほど、多くのハチたちが次に訪問しやすくなります。

B、自分がどこに行くべきかを他のハチたちの宣伝に応じて決める行動の仕組みは、人気を呼ぶ社会的な増幅プロセス (正のフィードバック) を通じて、探索委員会の間に次第に「合意」を生み出します。

そしてその合意がある境界を超えると (すなわち、ある候補地4へ訪問したハチの数が閾値いきちを超えると)、アゴヒゲ状の仮の宿に留まっていたコロニー全体が新しい巣に引越しをします。人間では、たとえば「三分の二以上の賛成による多数決」などといったルールで集団の意思を決定しますが、ミツバチの場合、閾値を超えることがそれに相当するのです。

C、実際、この決定は理ウに適ったものなのでしょうか。

私たちが会社の移転先を検討する場合、いくつもの候補を調べて比較したうえで、自分が最適と思う選択肢への支持を表明するでしょう。しかし、個々のミツバチが探索のために訪れる候補地は、ほとんどの場合にせいぜい一つか二つです。いくつもの巣の

候補地を訪れ、比較したうえで自分が最適と考える候補地を選んで宣伝しているわけではないのです。しかもミツバチは、レイチョウ類と比較したらまったく問題にならない、単純で小さい脳（マイクロブレイン）しかもっていません。

しかし驚くべきことに、ミツバチが探索委員会として集団で下す意思決定では、候補の中で客観的にもっとも良い（もっとも質の高い）巣を、非常に高い確率で正しく選択できることを、行動生態学者のシーリーらは、一連のコウミョウな実験によって明らかにしています。

ミツバチの巣探し行動には、集合知（collective intelligence）が見られるのです。集合知とは、「三人寄れば文殊の知恵」のように、個体のレベルでは見られない優れた知性が、群れや集団のレベルで新たに生まれる集合現象を意味します。

しかし、多数での意思決定が、必ずしも集合知を生むとは限りません。 D、現代社会の人間集団でよく見られる一時的な流行現象のことを考えてみましょう。

優れているとか美味しいという評判につられて、本当はあまり優れていない商品が雪だるま式に売れてしまい、しばらく経って冷静になって振り返ると「あの流行はいったい何だったのか」と不思議に思う、などという例は、決して稀なものではないでしょう。人気が人気を呼ぶ（不人気が不人気を呼ぶ）という仕組みだけでは、集合知は生まれません。ミツバチのコロニーでも同様の雪だるま現象が発生し、質の悪い巣が選ばれる可能性がありそうです。

株式市場ではしばしば、自分のもっている情報よりも、ほかの人の行動を情報源として優先して、それがつぎつぎと全体に広がっていく連鎖現象が見られます。このような現象は、経済学で「情報カスケード」と呼ばれ（カスケードとは階段状に連なった滝のことです）、現在いろいろな分野で関心が寄せられています。情報カスケードが生み出す可能性のあるエラーの連鎖を、ミツバチの集団意思決定はどのように防いでいるのでしょうか。

政治学者のリストラによる最近の理論研究から、ミツバチがエラーの連鎖を防ぐメカニズムについて、鋭いドウサツが得られています。リストラの研究は、エージェント・シミュレーションと呼ばれる技法を用いています。これは、さまざまな行動の仕組み（アルゴリズム）をもつ行為者（エージェント）をコンピュータの中に作り出し相互作用させることで、どのようなパターンが集

団レベルで生まれるかを調べる、コンピュータ・シミュレーションの技法です。

さて、このシミュレーションから、次のような行動の仕組みが、集合知を生み出すことが理論的に明らかになりました。

まず、行為者であるミツバチは、ほかのハチたちの示す行動に同調する必要があります。8の字ダンスで帰還したほかのハチたちが熱心に宣伝する巣の候補地ほど、まだ飛び立っていないハチが訪問しやすくなるパターンは、まさにこの同調条件を満たしています。

しかし、集合知が生じるためには、同時にもう一つの条件を満たさなければなりません。それは、訪れた候補地についての評価は、ほかのハチたちの影響を受けずに「完全に独立に行われる」という条件です。つまり、ほかのハチたちの宣伝に影響されて（＝同調して）訪れた候補地であっても、その候補地が巣としてどれだけ良いかに関する評価は、自分の目だけを信じて行うということです。

こうした評価の独立性があれば、ほかのハチに同調してある候補地を訪れても、訪問先の質が良くないと判断した場合、そのハチは帰還後にあまり熱心に宣伝をしません。8の字ダンスはごく短いものになり、まだ飛び立っていない他のハチたちの目に入る機会も少なくなります。それによって、たまたま生じたエラー（先に飛び立った複数のハチが偶然に良くない場所しか訪れなかったというエラー）が、情報カスケードのように群れ全体に次々に連鎖していくプロセスにストップがかかります。

このように、行動の同調と評価の独立性をうまく組み合わせた行動の仕組みによって、コロニー全体としての優れた遂行が生まれるようです。⁽⁸⁾このミツバチの行動の仕組みは、ヒトの社会行動の特徴を考えるうえで、非常に重要なポイントになります。

（亀田達也『モラルの起源』による）

注 *社会性昆虫＝同種の個体が集団を形成し、分業や協力を行う昆虫。

*専売特許＝ある品を独占的に販売する権利のこと。転じてある人や集団にとっての得意なこと。

*系統樹＝生物の各種族の進化や種族間の類縁関係を樹木状に示した図。

問一 傍線部(ア)(エ)(カ)の片仮名を漢字に直しなさい。

問二 傍線部(イ)(ウ)(オ)の漢字の読みを平仮名で書きなさい。

問三 傍線部(1)の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ ハチやアリになぞらえて、人間社会の集団行動を風刺しているもので、人間社会を批判的に表現したもの。

ロ ハチやアリが意思を持って話し合い、投票により決めごとをするという振る舞いを人間になぞらえて表現したもの。

ハ ハチやアリの行動に意味を持たせようとする人間の主観的な投影を、擬人化によって表現したもの。

ニ ハチやアリが言語をもたなくとも、非言語的な情報伝達を通じて合理的な選択がなされるプロセスを表現したもの。

問四 傍線部(2)とあるが、ヒトとミツバチの生物としての体の構造の違いについて述べている一文を抜き出し、最初の五字で

答えなさい。

問五 傍線部(3)の類義語として最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 俯瞰的ふかん

ロ 微視的

ハ 仰瞰的

ニ 客観的

問六 空欄A～Dに入るべき語を次の中から選び、記号をマークしなさい。ただし、同じ記号を二度以上用いてはならない。

イ しかし

ロ このように

ハ たとえば

ニ もし

ホ では

問七 傍線部(4)の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

- イ 訪問したハチの数がコロニー全体の半数を超えたことを意味している。
- ロ 訪問したハチの数がそれぞれの巣の候補地でまったく同数になったことを意味している。
- ハ 訪問したハチの数が8の字ダンスによる情報共有を効率的に行える規模に達したことを意味している。
- ニ 訪問したハチの数がある程度の数に達したことを意味している。

問八 傍線部(5)の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

- イ 三人いれば、その中に文殊菩薩のような優れた人物がいるという意味。
- ロ 三人で切磋琢磨すれば、文殊菩薩のように悟りが開けるという意味。
- ハ 三人で協力すれば、文殊菩薩のような良い考えが生まれるという意味。
- ニ 三人が同じ意見なら、その意見は文殊菩薩の判断のように正しいという意味。

問九 傍線部(6)の理由を述べたものとして、最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

- イ 他者の行動によってもたらされた情報は優先されやすく広まりやすいが、このような情報は優れた判断材料となるものばかりではないから。
- ロ 三分の二以上の賛成による多数決などといったルールで集団の意思決定を行うと、少数派の意見が取り入れられなくなってしまうから。
- ハ 情報にアクセスできる者とアクセスできない者の間で情報の非対称性が生じ、知識量に格差が生まれてしまい、最終的な意思決定を行うことができないから。
- ニ それまでの議論に費やした費用や労力、時間といったコストを考慮してしまい、新たな候補を受け入れることが難しい状態で意思決定を行ってしまうから。

問十 傍線部(7)とあるが、このメカニズムが作用する際に必要な二つのことは何か。文中より十二字で抜き出して答えなさい。

問十一 傍線部(8)とあるが、ミツバチは提示された複数の候補の中から、客観的に最も質の高いものを選び取る傾向を示している。これに対し筆者は、ヒトの意思決定にはミツバチの場合とは異なる事象が起ることを指摘している。その事象とは何か。次の空欄に合うように二十五字以上三十字以内で答えなさい。

という事象

問十二 本文の内容に合致するものはどれか。最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ ミツバチはエージェント・シミュレーションという技法を取り入れることによって、自身の観察に基づいて判断を行い他の個体の動きに安易に影響されることはない。

ロ ミツバチは優れた候補地を訪れた場合に積極的に宣伝をするため、評判依存の社会的フィードバックがコロニーに波及することはない。

ハ ミツバチはコロニーが過密になると分蜂行動を示し、旧女王が多数の働きバチを率いて新天地を求め、一部の働きバチは新女王と共に元の巣で社会的機能を継続する。

ニ ミツバチは環境に応じて個体が役割を自由に選択するが、集団内の調和を保つために各個体が環境に応じた行動を自律的にとる。

ホ ミツバチの8の字ダンスは情報伝達の手段となりうるが、抽象的・柔軟な言語とは異なることから、複雑な概念や文脈に応じた意味の変化を共有することはできない。

〔二〕 次の文章を読んで後の間に答えなさい。(字数制限がある場合、句読点・記号も一字と数える。)

教会で神への賛歌を捧げてきた声楽が、オペラとして劇場へとウエイトを移し、教会の外の演奏会場では楽器に主役の座を譲る。そして通奏低音を担当していた鍵盤楽器も合奏の舞台の前面から後退してゆく。弦楽器と管楽器による器楽合奏(オーケストラ)が演奏の主流になると、首席ヴァイオリン奏者が弓で、あるいはリュート奏者が楽器のネックを動かすなどして、テンポ、リズム、音量、表情などについてサインを送るというスタイルが見られるようになった。

通奏低音楽器が主役の座を降りて合奏集団としての「オーケストラ」が大きくなっていくと、全体を統括する指揮者がどうしても必要になる。そして演奏がより高度の技術を必要とし、音楽が複雑度を高めるにつれて、指揮者なしには専門化した演奏家集団であるオーケストラの演奏に秩序とハーモニーをもたらすことが難しくなる。それは社会が大きくなれば統治が問題となり、国家が大きくなればなるほど、統治のルールが明確化される必要が生じると同じことである。演奏者の集団も大きくなれば全体を統御する主体が必要になり、その適切な(過多でも過少でもない)コントロールによってメンバーたちから自発的な調和の精神を引き出す仕事が必要になる。いかにこの自由と秩序を両立させるかが指揮者に問われるようになるのだ。

その点では、オーケストラによる演奏は、⁽¹⁾一つのコミュニティーがいかなる自律性と調和を生み出すのかという問題と類比的に見ることができ。学生時代、レコードを聴きながら、当時のソ連には傑出したソロ奏者はいても、目立って優れたオーケストラの話あまり聞かないのはなぜだろうと思ったことがあった。それは自律性を保持しながら全体の調和を生み出すという「オーケストラ」のスピリットが、ソビエトの政治体制と合わないからだろうか、などと想像したものだ。

多数の人間から成る共同体には必ず「A」が必要になるように、合奏や合唱も、グループの人数が大きくなると、全体を統括する人物が不可欠になる。そう考えると、指揮者は昔から、多数の人々が演奏する際に必要とされた存在だったはずである。しかし問題は、どの程度専門化した仕事であったのか、そして一体何を期待される職分だったのかということだ。

「国家」という、共同体のもっとも発達した形は、歴史の特定の段階にあらわれた。例えば土地の私有制度が生まれ、複雑な生

産過程が職業を分化させ、職業間にある種の依存関係が発生し、対立関係が激しくなると恒常的な保護的権力が求められるようになる。そのために複雑な法秩序が形成される段階になって、国家統治があらわれる。ここで注目したいのは、「複雑な生産過程が職業を分化させ、相互依存の関係を生む」という現象である。

たとえばデモクラシーの下では、統治をする主体としての国民、その国民の代表としての議員、政策の決定に責任をもつ政治家と、それを実施する行政機構が発達してくる。そのおのおのの機関には主従と依存の関係が存在する。音楽演奏においても、作品の規模が大きくなり、演奏の技術が高度化してくると、演奏という「**B**」は次第に複雑になり、主従関係や依存関係が生じ、秩序ある統治が求められるようになるのだ。

「音楽」が何かを表現する芸術だとすれば、音程やテンポはもちろん、ダイナミックス（強弱）、音色、声や楽器の間の音量バランスなどに関する解釈が生まれ、それによって聴く者の心が動く。十九世紀に入るまでは、指揮の専門家ではなく、作曲家が担当する楽器を弾きながら指揮をする、あるいは「通奏低音」の担当者が指揮者的な役割を担っていた。しかし「主張やメッセージを含む大曲」が作られ出すと、その解釈を一手に担う指揮者という専門職が解釈者として誕生する。

十九世紀には、作曲家が指揮をすることは珍しくなかった。しかし十九世紀も後半に入ると、⁽²⁾作曲家と指揮者の仕事は分離し始める。その分化を示す代表的人物が、リストとワーグナーを師と仰いだ優れたピアニスト、ハンス・フォン・ビューローである。

ビューローの指揮は単に拍子⁽¹⁾を数えるというものではなく、（恐らくワーグナーの影響であろう）曲を解釈し、表現を重視する、というダイナミックなものであった。そのビューローの指揮を観て、すでにピアニストとしてデビューを飾っていたブルーノ・ワルターは、指揮者への転職（職種転換）を決意している。それほど熱のこもった指揮であったようだ。ビューローが何を指揮したのかは、「古典音楽のプログラム」であったこと以外は残念ながらわからないが、ワルターの決心は⁽³⁾あたかも天からの啓示を受けたかのようにであった。そのことを彼自身、次のように述べている。

大ピアニストとしての未来を思い描いた私の夢は、ハンス・フォン・ビューローを聞いたその日から、すっかり色あせてし

まった。私はフィルハーモニー・ホールの舞台後方にしつらえられた席に坐り、ティンパニのうしろの高い所から、彼が古典音楽のプログラムによってフィルハーモニー管弦楽団を指揮するのを、聞きかつ見たのであった。(中略) この日の私は、ビューローの顔に精神の充実と意志の緊張を見た。その動作には圧倒的な力を、そしてそのオーケストラ演奏には、入念と献身、表現のエネルギーと厳密さを感じとった。同時にまた、演奏しているのはこのひとりの男なのだ、彼はピアノストがピアノで演奏するように、百人の奏者をひとつの楽器に仕立て、その楽器で演奏しているのだ、ということをはっきりと悟った。

——この演奏会の夕べが、私の将来を決定したのである。いまや私は自分の定めを知った。私にとっては、もう指揮以外のどんな音楽活動も問題にならなかった。交響的な音楽以外のなものも、私を真に幸福にすることはできなかつた。(中略) さ、いはきよう投げられた、きよう私は自分の人生の目的をはっきり知った——私は指揮者になろうと決心したのだ、と。

(『主題と変奏 ブルーノ・ワルター回想録』)

このワルターの堅い決意の言葉には、リーダーとしての指揮者の理想的な姿が要約的に描かれており、「支配」を内的に正当化する根拠を論じたマックス・ウェーバーの言説を想起させる。政治学や社会学で解説されるように、ウェーバーは支配の内的な正当化の根拠と外的手段とを次の三つの純粋型に分けて論じた。

ひとつは、「永遠の過去」が持っている権威で、古い型の家父長や家産領主のおこなった「伝統的支配」がこれに当たる。西欧のクラシック音楽自体が過去の伝統の「上書き」として生き続けた面があるから、選ばれてその作品を指揮する者には伝統的支配の要件は基本的に備わっていると言えよう。

もうひとつは、ある個人に備わった非日常的な天与の資質(カリスマ^(ウ)神の恩寵)が持っている権威で、その個人の啓示や英雄的行為その他の指導的資質に対する、まったく人格的な帰依と信頼に基づく支配である。ウェーバーは、偉大な政党指導者やデマゴグの支配をネットウに置いている。指揮台に立った指揮者が放つある種の「オーラ」に惹きつけられて、プレーヤーたちは手や体の動き、タクトの動きに「魔法にかかったように」つられて演奏してしまうということもある。筆者は、二〇一九年一〇月

一日、NHKホールで上演されたトン・コープマン指揮のモーツァルト『レクイエム』*がその後テレビ放映されたのを観る機会があった。NHK交響楽団のプレーヤーはもちろん、ソリストも合唱団も、みな「魔法にかかったような」熱演であった。この作品の神々しい迫力を最高レベルにまで引き出し得たのは、指揮者の「カリスマ性」ゆえだと感じた。

三つ目の「合理的支配」は、制定法規の^(オ)ダトウ性に対する信念と、合理的につくられた規則に依拠した客観的な「権限」とに基づいた支配を指す。西欧音楽という数理的な形式と理論を背景に持つ芸術の形の基本を守る、楽譜に忠実に、そして作曲家が指定する楽器によって演奏されることなどの基本事項はそのまま守られねばならないという信念が生まれる。もし指揮者の^(カ)シイ性の幅が大きくなり出すと、彼はこの「合理的支配」の正当性を失うのだ。

こうしたウェーバーの「支配の諸類型」の論を、指揮者とオーケストラとの関係にそのまま置き換えることで指揮者の仕事が説明できるわけではない。ウェーバーの論じる「支配」は、服従することに対する利害関係が存在することが要件となる。その利害関係には信頼しうる基礎が必要になる。さらに信頼のベースはつまるところ正当性であるから、Cとなり、こうした置き換えが「支配」の本質を完全に解き明かしたことはない。ただ、⁽⁵⁾指揮者に求められる要件を、「要素」別に理解する手助けにはなろう。

この正当性が崩れる時もある。指揮者がオーケストラ楽団員やソリストと、曲の解釈をめぐってトラブルを起こすような場合だ。そのほとんどは、これらの支配の正当性の根拠を失ってしまうことから起こるようだ。

もちろん対立はありうる。例えばグレン・グールドとバインスタインは一九六二年四月六日のカーネギー・ホールでのブラームス『ピアノ協奏曲第一番』の演奏の際、テンポや強弱をめぐる解釈の違いでトラブルを起こした。しかしバインスタインは実に説得力のあるやり方で、「⁽⁶⁾大人の歩み寄り」を示している。演奏が始まる前に、バインスタインが聴衆の前で行った、「^{*}コンチェルトでは、指揮者とソリストのどちらがボスなのか」、「グールドの正統ならざる解釈を自分なぜ受け入れて指揮をするのか」を語る「前口上」は、言葉豊かな素晴らしいスピーチだ。

(猪木武徳『社会思想としてのクラシック音楽』による)

注 *通奏低音||バロック音楽で用いられる伴奏の一種。チェンバロやオルガン、ヴィオラ・ダ・ガンバなどの低音を用いて、即興的に和音を加える演奏方法。

*リユート||十五〜十七世紀を中心にヨーロッパで広く普及した弦楽器。ギターの祖先といわれる。

*ソ連||ソビエト社会主義共和国連邦(一九二二〜一九九二)の略称。

*マックス・ウェーバー||ドイツの社会学者、政治学者、経済学者(一八六四〜一九二〇)。

*デマゴグ||群集心理を利用して大衆を扇動する政治家。

*『レクイエム』||モーツァルトの最後の未完作品。死者のためのミサ曲。

*コンチェルト||協奏曲。独奏楽器とオーケストラが協奏する曲。

*ソリスト||独奏者。ここではグルードを暗示する。

問一 傍線部(ア) (ウ)の漢字の読みを平仮名で書きなさい。

問二 傍線部(エ) (カ)の片仮名を漢字に直しなさい。

問三 傍線部(イ)とあるが、筆者が「一つのコミュニティーがいかなる自律性と調和を生み出すのか」と類比的に見ているものは何か。最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 個々の演奏家の技術と演奏家集団の調和をいかに両立させるかという問題。

ロ 指揮者の統御する力と指揮者自身の調和の精神をいかに両立させるかという問題。

ハ オーケストラと指揮者間の独立性と信頼関係をいかに両立させるかという問題。

ニ 演奏者の自発性とオーケストラ全体の調和をいかに両立させるかという問題。

問四 空欄Aに入るべき語を文中から二字で抜き出して答えなさい。

問五 空欄Bに入るべき語を文中から四字で抜き出して答えなさい。

問十 傍線部(5)の「要件」として、ふさわしくないものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 伝統

ロ 資質

ハ 権限

ニ 利害

問十一 傍線部(6)とあるが、ここではどういうことか。最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ ソリストが率先して、ステージで握手をするために指揮者に近づき歩み寄ったこと。

ロ ソリストが忖度^{そんたく}して、自分と指揮者の解釈が合う演奏曲目に変更して演奏したこと。

ハ 指揮者が機知を發揮して、自分とは異なるソリストの解釈に合わせて演奏したこと。

ニ 指揮者が強制して、ソリストに解釈を変更させて自分の解釈に合わせて演奏したこと。

問十二 本文の内容に合致するものはどれか。最も適当なものを次の中から選び、記号をマークしなさい。

イ 指揮者に求められるのは、全体の調和を生み出すことよりも、カリスマ性を發揮して、表現豊かな演奏をするために必要な秩序を保つようオーケストラを支配することである。

ロ オーケストラ自身で音程やテンポをコントロールできるので、指揮者は専門職である必要はないが、高度な演奏技術が求められる演奏家は専門職である必要がある。

ハ 指揮者によるオーケストラの支配が正当性を持つには、服従することに対する利害関係とその基礎となる信頼関係が不可欠だが、それはまた正当性を前提としている。

ニ 指揮者という専門職は特殊なので、ピアニストや楽器演奏家から指揮者に転職すること、あるいは、指揮者から楽器演奏家に転職することはない。

成城大学 令和8年度 学部別選抜 (A方式)

2月6日：国語

■文章・図版クレジット一覧

〔二〕 猪木武徳著『社会思想としてのクラシック音楽』（新潮選書刊）